様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０５１５２

研究課題名（和文）学校を通して見る移民コミュニティの多言語使用と言語意識

研究課題名（英文）Multilingualism and language awareness at schools in immigrant communities

研究代表者
林　徹（Hayasi, Tooru）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：２０１７３０１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,500,000円

研究成果の概要（和文）：中国、ドイツ、ブラジル、パラグアイの移民コミュニティにおいて、移民が多く通う学校や補習クラスを共通のフィールドとして、生徒たちの言語使用と言語意識について、アンケートやインタビューによる調査を実施した。また、移民コミュニティではないが、大規模な言語交替がおこったアイルランドにおいても同様の調査を行った。その結果、いずれの地域においても固有言語に対する意識は集団の中で均質的ではなく、その位置付けが流動的であることが明らかとなった。さらに、ドイツとポーランドの国境地域における調査からは、新たに生まれつつある異言語間コミュニケーションの実態が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In China, Germany, Brazil, and Paraguay, data on language use and linguistic attitude has been collected through questionnaire surveys and interviews at schools as well as remedial classes in which the majority of students are of the immigrant origin. The same kind of investigation has also been conducted in Ireland, where a large-scale language shift from Irish to English occurred. The result of our surveys clarifies that the students' attitudes toward their ancestral language show no uniformity in each immigrant community and that its status is rather fluid. From our investigation in a border region between Poland and Germany, on the other hand, a new type of inter-language communication has been identified, in which both Polish and German are equally valued.

研究分野：言語学

キーワード：言語接触　異言語間コミュニケーション　多言語社会　言語交替　社会化　学校　移民

１．研究開始当初の背景

長年多くの移民を受け入れてきたヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニアの国々は、大小さまざまな移民コミュニティを抱えており、移民言語研究に多くの関心が注がれてきた。その結果は、ある国や地域における複数の移民コミュニティを対象とする研究（Extra & Verhoeven 1993, Clyne 2003 など）と、各移民コミュニティ内の言語使用の実態の記述・分析に結実した。ただし、前者は、ethno-linguistic vitality などの、必ずしも言語的ではない指標を使い、出身地の言語の維持を可能とする要因を探る研究に端的に見られるように、出身地言語と移住先言語という二項対立を前提としてマクロな比較に終止する傾向が強かった。一方、個々の移民コミュニティを扱う後者のような研究は、多様な言語使用の忠実な記録をもたらしたが、それは個別の事例の列挙に留まっていた。異なる移民言語コミュニティの比較、および比較を通じた一般化は行われていない状況であった。

Clyne, M.. 2003. Dynamics of language contact: English and immigrant language. Cambridge University Press.
Extra, G., and L. Th. Verhoeven (eds.) 1993. Immigrant languages in Europe. Multilingual Matters.

２．研究の目的

マクロな比較研究とミクロな実例研究の間の乖離を解消するため、具体的な言語使用や言語意識に関するデータを収集し、異なる移民コミュニティの言語状況を比較することによって、移民言語を取り巻く状況や移民言語が被る変化について一般化を試みる。

３．研究の方法

異なる移民コミュニティにおける言語使用、および言語意識は、それぞれの歴史的・社会的背景の違いを反映している。そのため、データが詳細であればあるほど、それらの比較は容易ではない。そこで、「学校」を共通のフィールドとすることで、移民コミュニティごとの条件の違いを最小化する。
対象とする移民コミュニティは、ドイツ、ポーランド、ブラジル、ボリビア、中国、日本とし、移民系の学校（補習学級などを含む）をフィールドとして、参与観察、インタビュー調査、アンケート調査等の手法を用いながら調査する。また、移民コミュニティではないが、大規模な言語交替が起こったアイルランドにおいても同様の調査を実施する。以上の調査結果に基づき、各移民コミュニティの言語使用と言語意識について類型化をおこない、各コミュニティを特徴付ける。

４．研究成果

上で述べたように、各地域の移民系学校を共通のフィールドとすることにより、比較可能な特徴を抽出できると考えたが、調査を進める中で、移民コミュニティごとの違いが大きいことが判明した。そこで、各地域の実態を明らかにすることに重点を置き、以下のような、各地域ごとの特徴が明らかとなった。

(1) ドイツ・ベルリンのトルコ系移民調査（担当：林）

ベルリン・クロイツベルク地区の学校を訪問し、トルコ語・ドイツ語二言語使用者の生徒たちの言語使用と言語意識についてアンケート調査を行った。2000 年から継続しているアンケート調査の結果と比較すると、以下のような変化が見られた。

・固有言語であるトルコ語の使用場面が減少し、受け入れ社会の言語であるドイツ語の使用場面が増加する中で、「夢の中で使う言語」という質問に対しては「トルコ語」と答える生徒の割合が変化していないなど、トルコ語からドイツ語への言語シフトがすべての場面で一斉に生じているわけではない。

・生徒全体がコードスイッチングに対して寛容なグループと、コードスイッチングに対してどちらかというと寛容でないグループの、２つに分裂しつつある。このような変化を生じさせている要因の一つとして、次第にトルコとの関係が薄れていくなかで、家族でトルコを訪れる頻度が下がっていっていることが挙げられる。トルコとの結び付きを維持しているグループには、コードスイッチングに対するより寛容な態度が観察される。

(2) ドイツ・教育制度調査（担当：平高）

ドイツの学校における授業参観やインタビュー調査を通して、移住の背景のある子どもに対する教育の現状と問題について考察した。現在ドイツでは、生活言語や学習言語としてのドイツ語教育だけではなく、「複言語話者に対する教育」が研究者の関心を集めている。移民の子どもたちは、ドイツに来るまでに身につけた言語が１つとは限らない。さらに、ドイツの学校ではドイツ語以外の外国語も学ぶことになる。多様性を重視するドイツの学校における教育は、そうした複数の言語や文化を身につけた人間の育成も想定されていることが特徴だと言える。

(3) ドイツ・ポーランド国境地域（担当：木村）

ポーランド系児童・生徒の多く通う学校の事例をもとに、ドイツ・ポーランド国境のドイツ側における言語使用状況について考察した。英語、通訳・翻訳、ドイツ語はいずれも、今後もこの地域の主要なコミュニケーション手段として使用されることが想定される。加えて、移民の言語であるポーランド語を用いることも、双方向の歩み寄りによる社

会統合にとって有意義だと考えられる。そのような可能性を追求するうえで、学校は（例えば交流会における二言語による演劇などを通して、）代替的な手段を体験・実践・練習する場として、社会にとって一種モデルとしての役割を果たしうると考えられる。

(4) ブラジル・パラグアイ（担当：山東）

ブラジル・大志万松柏学園、アルモニア学園、スザノ日伯学園や、パラグアイ・イグアス日本語学校を訪問して授業参観や関係者（主に日本語教師）へのインタビュー調査・アンケート調査を行い、公教育制度認定下の私立学校における日本語教育の内容について報告した。日系移民子弟を対象として始まったこれらの地域における日本語教育は、その対象を非日系児童生徒にも広げ、現在は日本語教育と合わせて日本文化教育や英語教育が重視されるに至っている。

なお、以上の調査は、研究協力者である森幸一とともにおこなった成果である。

(5) 中国（担当：生越）

朝鮮族の居住地としてそれぞれ異なった地域的特徴を持つ以下三都市において、朝鮮族学校の学生を主対象に言語使用・意識調査（アンケート及びインタビュー）を実施した。

・吉林省延辺朝鮮族自治州延吉市：朝鮮族の古くからの居住地として知られ、今も朝鮮族が集中的に居住
・吉林省通化市：朝鮮族と古くから関わりを持つものの朝鮮族が散居
・遼寧省大連市：朝鮮族の新たな居住地として浮上

分析の結果、中国語と比較した朝鮮語への志向性や、朝鮮語の中でもソウルのことばへの志向性には地域差と性別差が見られることがわかった。そしてこうした多様性が生まれる背景には「社会化」の違いが主たる要因となっていることが示唆される。

また日本の韓国学校と比較分析した結果でも、生徒たちの言語能力に関係する要因として、①生徒の生得的特徴、②社会的特徴、③生徒の行動上の特徴が挙げられた。

(6) アイルランド（担当：嶋田）

アイルランド南西部にあるアイルランド語使用地域の小学校を訪問し、言語使用の実態を調査した。その結果、家庭の言語が英語である子どもたちが増えてきているのでとくに低学年ではその子どもたちへの対応に手間がかかる、アイルランド語を母語とする児童の言語能力をさらに伸ばす豊かな教育ができない、子どもの英語化に歯止めがきかない、保護者に家庭でアイルランド語を使うようにまでは言えない（アイルランド語に自信のない親に、家庭でそれを使うように強要できない）、アイルランド語を話す補助教員が他校とかけもちという状況で、児童のアイルランド語での学習の手助けがゆきとどかない、といった教育現場が直面している課題が浮き彫りとなった。

このような言語状況を踏まえた上で、アイルランド語と英語のバイリンガルを増やすことを目標とするアイルランド語使用地域の言語教育政策（2017-2022）の内容についても検討し、「アイルランド語保持のための具体的な施策の立案と実行をそれぞれのコミュニティに委ねる」とした本政策を、現実的な政策であると評価した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線、研究協力者には波線の下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）

①林徹(2018)「トルコ語・ドイツ語二言語使用者の生徒たちの言語選択と言語意識：ベルリン・クロイツベルクの学校でのアンケート調査に見られる変化」林ほか（〔図書〕の①。以下同様）所収，79-92，査読有
②平高史也(2018)「ドイツ・ベルリン州におけるバイリンガル教育」『慶應義塾外国語教育研究』，14，81-91，査読有
③平高史也(2018)「ドイツにおける移住の背景にある子どもに対する教育を点描する」林ほか所収，69-77，査読有
④生越直樹・新井保裕・孫蓮花・李東哲(2018)「中国朝鮮族学校の生徒たちの言語能力と影響要因について：日本の韓国学校と比較しながら」林ほか所収，23-36，査読有
⑤嶋田珠巳(2018)「ゲールタハト（アイルランド語使用地域）の小学校にみる今日的葛藤―アイルランドの言語政策とコミュニティ―」林ほか所収，101-108，査読有
⑥木村護郎クリストフ(2018)「異言語間コミュニケーションにおける学校の可能性：ドイツ・ポーランド国境の事例から」林ほか，93-100，査読有
⑦新井保裕・生越直樹・孫蓮花・李東哲(2018)「中国朝鮮族言語使用・意識の地域差と性別差：「学校」から見える「社会化」」林ほか所収，3-22，査読有
⑧森幸一(2018)「移民コミュニティの子弟教育と言語：パラグアイ国イグアスー移住地の二言語教育体制と問題」林ほか所収，37-68，査読有
⑨Adachi, Mayumi(2018)‘Attitudes toward language use among Vietnamese resident in Kanagawa’『東京大学言語学論集』, 39, 3-15, 査読有
⑩Yamashita, Rika (2018) ‘Problems in explaining use of desu/masu forms: Evidence from a small community classroom’『東京大学言語学論集』，39，365-380，査読有
⑪鎌倉千秋・平高史也(2017)「多言語教育に

おける放送メディアの役割」平高ほか所収, 43-55, 査読無
⑫生越直樹(2017)「第 9 章　在日コリアンの言語使用の実態とその背景」平高ほか所収, 117-129, 査読無
⑬生越直樹・新井保裕・孫蓮花(2017)「日本の韓国学校と中国の朝鮮族学校の生徒たちの言語使用」中国韓国（朝鮮）語教育研究学会 2017 年度学術大会論文集, 434-438, 査読無
⑭嶋田珠巳(2017)「社会言語学の課題―ことばの選択を考える」西山佑司・杉岡洋子（編）『ことばの科学―東京言語研究所開設 50 周年記念セミナー―』開拓社, 87-126, 査読無
⑮Kimura, Goro Christoph (2017) ‘Interlinguals Strategien als Element der Interkulturalitaet: Dargestellt am Beispiel des Sprachmanagements einer deutsch-polnischen Theaterinszenierung’ “Aussiger Beitraege, Germanistische Schriftenreihe aus Forschung und Lehre”, 11, 141-154,査読有
⑯Heirich, Patric & Rika Yamashita (2017) ‘Problems in explaining use of desu/masu forms: Evidence from a small community classroom’ Smakman, D. and P. Heinrich. (Eds.) “Urban sociolinguistics: The city as a linguistic process and experience”, 130-147, 査読無
⑰Hayasi, Tooru (2016) ‘Variability in linguistic judgement: An analysis of questionnaire survey data from Istanbul and Berlin on the usage of Turkish demonstration’ “Turkic Languages”, 20, 60-73, 査読有
⑱Shimada, Tamami (2016) ‘Speakers’ awareness and the use of do be vs. be after in Hilberno-English’ “World Englishes”, 35, 310-323, 査読無
⑲Hayasi, Tooru & Ozsoy, A. Sumru (2015) ‘Su or bu/o: Turkish nominal demonstratives with concrete referents’ Deniz Zeyrek, et al. (eds.) “Ankara papers in Turkish and Turkic linguistics”, 1, 389-401, 査読有
⑳Shimada, Tamami (2015) ‘Morphosyntactic features in flux: ‘Irishness’ and ‘Standard’ in Hiberno-English speakers’ “Arbeiten aus Anglistik und Amerikanistik”, 40, 49-74, 査読有

〔学会発表〕（計 19 件）
①Hayasi, Tooru (2018) ‘Ten years in Kreuzberg: Change in language use and awareness among Turkish-German bilingual students’ International Symposium: Current topics in Turkic linguistics
②山下里香(2018)「「多言語使用」から「境界」の言語学へ：「国際」と「国内」のはざまで」社会言語科学会第 41 回大会
③平高史也・荒木萌(2018)「ドイツ語統合コースの現状：大量難民受入れ以降の状況を中心に」社会言語学会第 41 回大会
④生越直樹・新井保裕・孫蓮花・李東哲(2017)「民族学校生徒の朝鮮語使用：日本の韓国学校と中国の朝鮮族学校での調査から」第 255 回朝鮮語研究会
⑤生越直樹・新井保裕・孫蓮花・李東哲(2017)「中国朝鮮族の学生の朝鮮語能力に影響を与える要素（原題韓国語）」中国韓国（朝鮮）語教育研究学会国際学術大会 2017 年中国韓国語教育発展フォーラム
⑥Shimada, Tamami (2017) ‘Conditions for future language shift?: Japanese inclination towards the English language in school curricula and TV’ 22nd Conference of the International Association for World Englishes
⑦Kimura, Goro Christoph (2017) ‘Why and how ideology matters for Language Management Theory’ International Language Management Symposium
⑧Adachi, Mayumi (2017) ‘Stance-marking uses of stance-final demonstratives in Vietnamese’ 15th International Pragmatics Conference
⑨新井保裕・生越直樹・孫蓮花・李東哲(2017)「中国朝鮮族言語使用・意識の共通性と多様性：延吉市と大連市のアンケート調査結果比較」社会言語科学会第 40 回研究大会
⑩嶋田珠巳(2016)「アイルランド語使用の現在と言語教育の課題」日本学術会議言語・文学委員会文化の邂逅と言語分科会
⑪木村護郎クリストフ(2016)「ドイツ東部国境地域における継承語としてのポーランド語教育の現状と課題」第 14 回東京移民言語フォーラム
⑫Kimura, Goro Christoph (2016) ‘Interlinguale Strategien und Interkulturalitaet’ Internationale Tagung der Gesellschaft fuer interkulturelle Germanistik
⑬木村護郎クリストフ(2016)「ドイツ・ポーランド国境における言語景観」第 15 回東京移民言語フォーラム
⑭Kimura, Goro Christoph (2016) ‘Signs if deterritorialization? -Linguistic Landscape at the German-Polish border’ Slavic-Eurasian Research Center 2016 Winter International Symposium
⑮山東功(2016)「南米移民社会における継承語と「国語」教育―ブラジル、ボリビア、パラグアイの日本語学校をめぐって―」第 14 回東京移民言語フォーラム
⑯生越直樹(2016)「大連の朝鮮族コミュニティの特徴について」第 14 回東京移民言語フォーラム

⑰嶋田珠巳(2016)「アイルランド語使用の小学校調査から見えてきたこと」第13回東京移民言語フォーラム
⑱Hirataka, Fumiya (2015) ‘Aus der Untersuchung zum “Language Life” von Japanern in nicht-englischsprachigen Grossstaedten’ Schwerpunkte Duesseldorf/Shanghai.Ⅷ. Kongress der Internainalen Vereinigung fuer Germanistik
⑲嶋田珠巳(2015)「アイルランドにみる言語の衝突と邂逅」第18回明海大学応用言語学セミナー

〔図書〕（計5件）
①林徹・安達真弓・新井保裕（編）(2018)『東京大学言語学論集別冊 2　学校を通して見る移民コミュニティ：多言語使用と言語意識に関する報告』東京大学文学部言語学研究室，112頁
②平高史也・木村護郎クリストフ（編）(2017)『多言語主義社会に向けて』くろしお出版，227頁
③嶋田珠巳(2016)『英語という選択：アイルランドの今』岩波書店，222頁
④鍛治広真・アクマタリエヴァ　ジャクシルク・林徹(2015)『キルギス語基礎語彙集：言語調査実習の報告』東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室，146頁
⑤工藤眞由美・森幸一（編）(2015)『日系移民社会における言語接触のダイナミズム―ブラジル・ボリビアの子供移民と沖縄系移民―』大阪大学出版会，318頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕
ホームページ等　0件

６．研究組織
(1)研究代表者
林　徹（HAYASI, Tooru）
東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授
研究者番号：20173015

(2)研究分担者
平高　史也（HIRATAKA, Fumiya）
慶應義塾大学・総合政策学部（藤沢）・教授
研究者番号：60156677

生越　直樹（OGOSHI, Naoki）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：90152454

嶋田　珠巳（SHIMADA, Tamami）
明海大学・外国語学部・教授
研究者番号：80565383

木村　護郎クリストフ（KIMURA, Goro, Christoph）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：90348839

山東　功（SANTO, Isao）
大阪府立大学・高等教育推進機構・教授
研究者番号：10326241

工藤眞由美（KUDO, Mayumi）
大阪大学・文学研究科・名誉教授
研究者番号：30186415

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
森　幸一（MORI, Koichi）
サンパウロ大学・哲学学部・教授

安達　真弓（ADACHI, Mayumi）
東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所・研究員

山下　里香（YAMASHITA, Rika）
関東学院大学・経済学部・講師

新井　保裕（ARAI, Yasuhiro）
東京大学・総合文化研究科・学術研究員